

II 妊婦への結果説明について

(1) WB 法検査で判定保留または陽性であった場合

Q: どうしたらよいでしょうか？

A:

- ① 授乳や性交渉を除く普通の生活では、家族や他人にうつすことはありません。
- ② 母子感染については、母乳を介して子どもに感染する可能性がありますので、感染予防を考える必要があります。生まれてくる自分の子どもへの感染のリスクを減らすために、授乳栄養法に関し正確な情報を十分に得て、栄養方法を選びましょう。

Q: 夫や家族に相談すべきでしょうか？

A:

家族と夫への対応は別と考えたほうが良いでしょう。

<夫>

ご夫婦の状況によって変わりますが、可能であれば相談した方が良いでしょう。

HTLV-1 陽性の場合、断乳をはじめ、子どものHTLV-1 感染の検査などを考えるにあたって、家族で情報を共有して対応する方がよいと思われます。

悩みや不安を抱えることが多いため、夫婦としてお互いに支え合う関係として、理解や協力を得る方がよいと思われます。



<家族>

あなたがキャリアだと診断された場合、ご家族の中にもキャリアがいる可能性があります。しかし、それぞれのご家族、ご家庭にいろいろな事情があると思いますので、家族に伝えるべきかどうかは、HTLV-1 のこと、ATL やHAM などの病気のリスク、生活上の留意点などの情報を十分に得たうえで、ご自身で判断して下さい。

Q: 無事出産することはできますか？

A:

- ① HTLV-1 感染が妊娠・出産に悪影響をもたらすことはありません。
- ② HTLV-1 が原因で赤ちゃんに奇形を生じたり、生まれた後に異常を起こすこともありません。
- ③ 出産も通常分娩と変わりありません。



(2) WB 法検査で判定保留であった場合

Q: WB 法の判定保留者に PCR 法を実施したほうが良いかという問い合わせに対してどのように答えれば良いでしょうか。

A:

- ① PCR 法検査で陽性であった場合は HTLV-1 キャリアとして今後対応します。
- ② この検査はまだ十分に規格化されておらず、保険適用外です。
- ③ PCR 法が陰性の場合、完全に HTLV-1 キャリアを否定できませんが、キャリアでない可能性が高いと考えられています。そのため、完全人工栄養・凍結母乳栄養・短期母乳栄養方法を積極的に勧める必要がなくなります。

(3) WB 法の判定保留者に PCR 法を実施した場合

Q: なぜ PCR 法で陰性であった妊婦から出生した児に対して長期間 (3 ヶ月以上) 母乳栄養を行ってはいけなのですか？また、出生した児をフォローアップしなければならないのでしょうか？

A:

- ① これは PCR 法に測定限界があるためです。10 万個のリンパ球で 1~数個以上の感染細胞があれば、PCR 法陽性となりますが、それ以下だと陰性となります。
- ② 現状では、PCR 法で陰性であっても完全にウイルスが存在せず、絶対に母子感染が起こらないと断定できませんが、感染のリスクは極めて低いと考えられます。
- ③ 厚生労働科学研究齋藤班では、PCR 法陰性者に対して「完全にキャリアを否定することはできないが、人工乳を勧めるエビデンスはない」としています。
- ④ 理論上は、極めてウイルス量が少なく母子感染のリスクは低いと考えられますので、4 ヶ月以上の長期母乳も選択肢に加えて担当医と相談のうえ決定してください。
- ⑤ 完全な人工栄養でも約 2-3% に母子感染がおこりますので、PCR 法が陰性であってもこれ以下に母子感染を減らすことは困難です。



Ⅲ 妊産婦への保健指導について

(1) 母子感染を防ぐための授乳方法

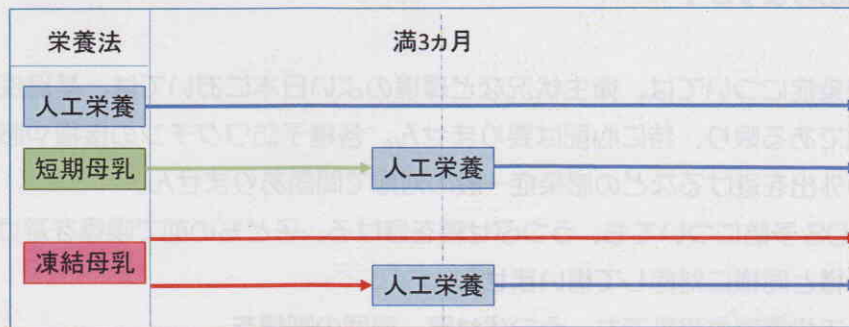
Q: HTLV-1 母子感染を防ぐための授乳方法として、どのようなものがありますか？

A:

- ① 初乳も含めて、一切、母乳を与えず、人工乳のみで哺育する「完全人工栄養」があります。
- ② 母乳をどうしても与えたい場合に行う栄養方法として、「短期母乳栄養（満3ヶ月まで）」と「凍結母乳栄養」があります。
- ③ 上記の栄養法を選択すれば、いずれの場合でも母子感染の割合を2-3%に減らすことができます。

「短期母乳栄養」は、生後満3ヶ月を越えない期間、母乳を授乳し、その後、人工乳に切り替える栄養方法です。「凍結母乳栄養」は搾乳した母乳を冷凍庫で凍結し、解凍して与える栄養方法で、満3ヶ月以上与えても問題はありません。これらの栄養方法では、母乳が不足した場合人工乳で補っても構いません。

授乳栄養法



Q: なぜ母乳で感染するのですか？

A:

- ① HTLV-1 が人に感染するメカニズムとして、HTLV-1 に感染したリンパ球が、生きのまま大量に赤ちゃんの体内に入ることが、感染が成立するひとつの条件になります。
- ② 母乳の中にはリンパ球が多く含まれており、赤ちゃんが母乳を飲むことにより、たくさんのリンパ球を体内に取り込むことになるからです。

Q: 母乳を与えなければ、HTLV-1 の母子感染は防げますか？

A:

母乳からの感染は防げますが、それ以外の経路による母子感染の可能性が残ります。完全人工栄養を行った場合でも約 2-3%程度感染がおこります。残念ながらこの原因は明らかになっていません。

Q: 初乳はタンパク質が多く、特に胎盤から受け継いだ免疫力が沢山含まれていると聞いています。初乳だけでも与えることはできませんか？



A:

3ヶ月以内短期母乳保育での母子感染率は厚生労働科学研究班のデータでは 1.9%であり、完全人工栄養児の約 2-3%と同等です。初乳のみのデータはありませんが、少なくともこれ以上になることはないと思います。

Q: 完全人工栄養の場合、感染症や乳幼児突然死症候群（SIDS）の危険性が高くなる可能性はありますか？

A:

- ① 感染症については、衛生状況など環境のよい日本においては、基礎疾患のない成熟児である限り、特に心配は要りません。各種予防ワクチンの接種や感染症の流行期の外出を避けるなどの感染症一般の対応で問題ありません。
- ② SIDS 予防についても、うつぶせ寝を避ける、子どもの前で喫煙を避けるなど他のお子様と同様に対応して構いません。

人工栄養でも母乳でも、うつ伏せ寝、周囲の喫煙を防ぐことによって危険性を大きく減らすことができ、実際に外国では、うつ伏せ寝をやめさせることで大幅に SIDS が減少しています。



★SIDSとは★

SIDSとは、乳幼児突然死症候群（Sudden Infant Death Syndrome）
それまで元気だった赤ちゃんが、事故や窒息ではなく睡眠中に突然死亡する病気です。原因はまだわかっていません。赤ちゃんを守るポイントとしては、うつぶせ寝は避ける、たばこをやめる、などがあげられます。

Q: HTLV-1 母子感染はおもに母乳を介しておこるわけですから、人工乳にすることでよいのではないですか？なぜ、短期母乳や冷凍母乳も選択肢に入るのですか？

A:

① **母乳には利点があるからです。**

母乳には未熟な赤ちゃんの免疫力をサポートする成分や発達を促す成分が含まれています。また、肥満や脂質代謝異常、高血圧、インスリン抵抗性などのメタボリックシンドロームのリスクも人工栄養に比べて低いことも知られています。さらに母子の愛着形成を促す作用など、多くの利点があります。

② **母乳の利点を大事にし、なおかつ感染率を減少させる方法を検討した結果です。**

母乳栄養の利点を生かしながら、母子感染のリスクを減らす方法として、3ヶ月までの短期母乳栄養や冷凍母乳栄養が限定された地域で試みられ、完全人工栄養に匹敵する効果があったと報告されています。

これらの栄養法を用いた人数は少なく、理論上は母子感染予防効果があると推測されますが、現時点においては医学的には十分な信憑性に乏しいです。

③ **母乳の期間を短期とする理由は、長期授乳を継続すると子どもへの感染率が増加するデータがあるからです。**

4ヶ月以上の母乳哺育を行なうと、HTLV-1 母子感染のリスクは完全人工栄養児の約2-3%に比べて5~6倍高くなることが明らかになっています。

Q: 短期母乳の期間とその安全性はどうなっていますか？

A:

満3ヶ月までの母乳哺育での感染率は1.9%でしたが、4ヶ月以上の母乳哺育での感染率は17.7%に増加するというデータから短期母乳の目安は3ヶ月としています。

短期投与における感染率低下のメカニズムについては今のところ解明されておらず、十分な症例数でないため、今後さらに検証が必要です。

Q: 実際に短期母乳栄養を選択した場合、どのようにすればよいですか？

A:

満3ヶ月までの授乳を希望される場合は、分娩施設を退院する際に、満3ヶ月で母乳を中止するための方法について情報を与えましょう。

満3ヶ月になってから相談をはじめると、母乳の中止が遅くなり感染率を高くしてしまうため、産後2ヶ月ごろから、母乳中止の方法を理解して具体的に実施できるよう、指導を行うことが重要です。

Q: 短期母乳栄養を選択した場合、母乳から完全人工栄養に切り替えるのではなく、母乳から凍結母乳栄養に切り替えしてもよいですか？

A:

理論的には可能ですが、現在のところ詳しいデータはありません。このため産婦人科診療ガイドラインでは①人工乳、②凍結母乳、③3ヶ月までの短期母乳のみを推奨しています。

Q: 凍結母乳に関して教えてください。

A:

- ① 母乳を24時間冷凍し（家庭用冷蔵庫で可）、解凍後37℃に温めて哺乳瓶で投与方法です。
- ② 母乳中に含まれる免疫物質を赤ちゃんに投与できる利点がありますが、直接授乳できないことは人工栄養と同じという欠点もあります。
- ③ 未熟児などの特殊な場合で、母乳も与えたいが感染もできるだけさせたくない時の選択肢になります。

但し、凍結母乳投与における感染率の報告は十分な症例数によるものではないため、今後さらに検証が必要です。

Q: 凍結母乳のために搾乳するときに母乳中の細菌数を減らす方法はありますか？

A:

- ① 電動搾乳器を使用する場合には、部品の扱いに気をつけて下さい（事前に説明書を読んで下さい）。
- ② 搾乳前に完全に手を洗い、爪をきれいにして下さい。
- ③ 搾乳容器や搾乳器のカップの内側を触らないで下さい。
- ④ 搾乳開始後、最初の10mlを捨てても細菌を減らす効果はありません。
- ⑤ 乳頭や乳輪を石鹸で洗う必要はありません。

